

---

# 怪傑夜叉丸

タナトスの鎌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

怪傑夜叉丸

### 【Nコード】

N7410Y

### 【作者名】

タナトスの鎌

### 【あらすじ】

人工の明かりが月光を押しやる現代。夢に心奪われ、宵闇に住まいを置く者があった。その名は怪傑夜叉丸。職は盗人。夜叉の血を引くと豪語する大泥棒や、学会を追放された博士。有名なコロナボ刑事にそっくりな平刑事や一癖どころか二癖も三癖もある人々が集まる刑事課の特殊部。そんな人々が織り成す、はちゃめちゃな物語。

新人賞への応募を目指している作品です。誤字脱字や文章崩壊などがありましたら、ビシバシ指摘してください。

## 01 白髪妖怪 (前書き)

あらすじにもあるとおり、新人賞への応募を目指している作品です。誤字脱字や文章崩壊などがありましたら、ビシバシ指摘してください。

また、何かアドバイスがありましたら、ぜひぜひお願いします。

## 01 白髪の妖怪

静かな夜の美術館で、けたたましく警報が鳴り始めた。

「夜叉丸が出たぞ！」

「どこに行った!？」

「そっちじゃないか？」

「いや、あっちだ！」

「違う、こっちだ！」

警官達がドタバタと騒ぎ出す。

「ふはははははは」

突然、笑い声が辺りに響きわたる。

サーチライトが捉えたその人物は、

真紅の瞳を輝かせ、真っ白な髪を振り乱し、

山伏の格好をした背の高い男だった。

さながら歌舞伎役者のようなその風貌を知らないものは、

今の日本にはいないであろう。

彼こそが神出鬼没の大泥棒、怪傑夜叉丸である。

「予告通り、高浜美術館の秘宝、ゴルゴンの涙は貰い受けた。」

夜叉丸が掲げた手には、大粒のサファイヤが握られていた。

独特の怪しいゆらめき。まさしく噂に名高いゴルゴンの涙である。

「鞍馬刑事に行っておけ!もっと骨のあるやつを指揮に選べとな！」

彼は言い放つと手にもっていた錫杖を振りかざた。

その瞬間に一陣の風が吹き、夜叉丸は姿を消した。

呆然とする警官達と、美術館の目玉を奪われたことに絶望している

館長を残して……

## 02 平刑事はつらいよ

突然の課長からの呼び出しに佐藤 徹刑事は面食らっていた。

(何かわざわざ課長が呼び出すようなことをしただろうか……)

少し前かがみになりながらブツブツ言っている様子はまるで何か難しい事件を解決しようとしているようだが、実際はなぜわざわざ呼び出されているかを考えているに過ぎない。

(褒められる？ ありえない。じゃあ、やっぱり怒られるのか)

考えたところでびくりと体を震わせるのはとても35才とは思えない動作だ

(最近は何をしでかしただろうか……)

佐藤刑事が怒られる理由を考えている間、彼について少し説明しよう。

年齢は先程も言ったように35才。女つ毛がない独身男である。公務員に就職させたいという母の願望と、男のロマンを叶えて欲しいという父の願望がかさなり、結果的に警察官になった。そんな父と母が交通事故で他界して4年ほど経っている。

さて、彼の外見についてだが、皆さんは刑事コロンボという小説をご存知だろうか？

主人公のコロンボ刑事が次々に難事件を解決していくという推理小説だ。

佐藤刑事はその主人公、コロンボにそっくりだった。わざわざ友人

がトレンチコートをプレゼントする程である。

だが、本人はあまりそれを嬉しく思っていない。時たまふざけてコロンボと呼ばれることがあるが、そんな時はむず痒いような、嬉しいような、腹正しいような、妙な気持ちになるからだ。

そんな佐藤刑事はまだ怒られる理由について考えていた。

（捜査中に猫の足を踏んでホシに感づかれたことか？ いや、でも結果的にあれが逮捕に繋がったわけだしな……）

くだらないことを考えている間に課長室の扉についた。

深呼吸をして、失礼します。という義務的な掛け声と共に、思い切った扉を開ける。

職員室に呼び出されたときも同じような気持ちだったな、彼はふとそう思った。

要するに成長していないのである。

「やあ、コロンボ君」

「……やめてくれませんかその呼び方」

しよっぱなから佐藤刑事は凄まじい疲労感に襲われた。それを知り目にニツコリと爽やかな笑みを浮かべるのは捜査第一課の課長、鞍馬 龍である。

26才という若年にして、警視にまで上り詰めた実力者だ。と、同時に彼は巷を賑わせている怪傑夜叉丸の良きライバルでもあった。しかし、ある汚職事件の解決と共に異例の昇進。夜叉丸の担当から外れたため、今は夜叉丸が好き放題やっているわけである。

「さて、ところで君を呼んだのは、この書類にサインしてもらっためなんだ」

そういつと鞍馬警視は引き出しから白いものを取り出した。それを見た瞬間、再び佐藤刑事を凄まじい疲労感が襲う。

「……こんな果し状書くような紙に、異動願い書く必要があるのですか？」

「あるよ。だってこの方が楽しいじゃないか」

それは昔ながらの古風な折り方で折られた手紙だった。ご丁寧に大きな筆文字で“異動願い”と書かれている。

「二つ、言いたいことがあるのですがいいでしょうか？」

「どうぞどうぞ」

「まず、人の異動願いを勝手に出さないとただけですか？それからも一つ、なんで私が特殊部に行かなきゃなんのですか」

（そう、異動願いを出せというのはこの人なら十分にありえることだ。しかし、特殊部なんて！）

特殊部 変人と狂人のたまり場として有名なところである。主に都市伝説と言われるような事件を取り扱っている。事実、特殊部自体が半分都市伝説と化している。

「嫌かね？」

「嫌です」

「そうか、それは残念だな。特殊部には私の良き友人もいるというのに」

（だから嫌なんだよ！）

佐藤刑事は心の中で叫んだ。鞍馬警視は元特殊部の人間だ。つまり

彼も、彼の良き友人とやらも、変人が狂人なのだ。

(これ以上、変人や狂人の知り合いはいらん!!)

と、彼は思ったのである。

「ま、どうしても君が断るといふのならば……」

カチリ、と、金属音がする。佐藤刑事はその音の正体がかつていた。拳銃の安全装置を外す音である。

「こちらにも考えがあるんだよね」

キラリと鞍馬警視の目が光った。有無を言わさぬというのはこういう事なのだろうと佐藤刑事は思った。

「もう一度聞くよ？ 特殊部に入るよね？」

「……はい」

佐藤刑事が観念した瞬間であった。



02 平刑事はつらいよ (後書き)

疲労感で人は死ねると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7410y/>

---

怪傑夜叉丸

2011年11月24日23時57分発行